



鮮血の聖女

# エグレア

聖なる執行者

小説 黒井弘騎

挿絵 にの予

第一章

汝、慈しむか屠るか

006

第二章

汝、贖うか溺れるか

053

第三章

汝、偽るか向き合うか

106

第四章

汝、堕ちるか報いるか

144

第五章

汝、救いたまえ

198

## 登場人物紹介

Characters



### エクレア・ネーベルザルグ

巡礼使徒として各地を巡る聖王教会のシスター。神の加護により得られるある奇跡の力を発現して悪魔と闘う。

### メアリ

辺境の独立都市・ストレインに住む少女。

### ベリルオーズ伯爵

古城に住まい、ストレインを恐怖で支配する貴族級悪魔。

熟れきった太ももは、ストッキング越しでも健康的な肉感をまるで減じていない。蕩けるような柔らかさに、若さゆえの瑞々しい張り。聖女の美脚は、悪魔にとってこれ以上ないご馳走だった。不気味な触手が、すべすべしたタイトに何度も何度も擦りつけられる。

「ふむ、この張り、この柔らかさ、この弾力。肌のきめ細かさといひ滑らかさといひ、まさに極上だな。流石は神に愛された女の肉体、素晴らしいぞシスター」

「ふ、ふんっ！ 当然ですわ、主に捧げるための肉体ですもの……く、ん！ 本来、あなたのような下衆が触れていいものではありませんのよ……くうんっ！」

にゆる、ぐちゅっ！ 反抗的な言葉を吐いた刹那、太ももをきつく締め上げられた。

「くう……あ！ そこつ、き、きつ……っんっ！」

熟れきった腿肉はしなやかで、乱暴な圧搾に負けじと抜群の弾力で押し返してくる。そんな抵抗を楽しみながら、目玉蟲はストッキング越しに硬い眼球を食い込ませてきた。

「んんっ……つく！ あ、悪魔め……んくううっ！」

おぞましいワイヤーに引き絞られた太ももが、ピクンと辛そうに跳ねる。苦痛に顔をしかめるエクレアだったが、決して苦痛の声をあげる事はなかった。唇を噛み締め、気丈な視線で悪魔を睨み続けている。

「生意気な神の犬が、口の利き方に気をつけろ。お前はこれから伯爵様の花嫁になるのだぞ。処女検査の前に、少し教育の必要があるな……おい、アベル」

「は、はいバレギロ様……へへっ」

その言葉に、神父は喜び勇んで席を立った。下卑た笑みを浮かべ、聖女の背後に回る。

「いつも通り教育してやれ。念入りにな」

「ええ、ええ。それはもう、承知しておりますとも」

下卑た笑みを浮かべ、アベルは背後から聖女の胸に手を伸ばした。後ろ手に拘束された姿勢のせいで、シスターの両胸は前方に向けてつんと張り出している。馬車の振動にあわせぶるんぶるんと揺れている豊満巨乳に、男の指が無遠慮に食い込まされた。

「あらあら……アベル神父、何のおつもりですか？」

背後を振り返る事さえせず、エクレアは呟いた。静かな怒りに一瞬縮み上がるアベルだったが、しかし柔らかな胸をまさぐる手を止めようとはしない。

「すみませんね聖女様。でもこれも仕方ないのです、わたしだって死にたくないんです」

いつも通り卑屈な態度に、さらに下劣さも加わっている。両手に余る豊熟果の量感を嘔み締めながら、中年男は聖職者とは思えぬ邪悪な表情を浮かべていた。

「ど、どうせ悪魔に敵うわけがないのですよ……ならいやでも従うしかないではないですか！ これも主の教えですよ、命は大切にしろと言う事です！」

「クク、よく言うわ。若い娘を味わえるならと、真っ先に悪魔に魂を売った背教者が」

城までの介添人を務めつつ、悪魔のおこぼれにあずかり花嫁を陵辱する。アベル神父は信仰よりも私欲を取り、魔の使いと共謀していたのだ。

「やれやれ……恥ずかしくないのですか神父？ 聖職者として、いや人間として」

「う、うるさい！ 神の愛を教えてやるのも我々の務め……で、ではいきますよ聖女様！」  
罪悪感を詭弁で誤魔化し、裏切りの徒はいつも通り欲望に従った。これまで何人もの娘

にしてきたように、動けない状態の花嫁を思うがままに弄ぶ。脂ぎった指が、清潔なシスタークロスに皺を刻みめり込んだ。

「ん……つくう！」

「おお、素晴らしい！ この豊満さと柔らかさ、貧相な小娘どもとは格が違いますなあ！」  
背後から思いきり押し寄せられ、左右同時に遠慮なく揉み回される。信仰より欲望を取った男だ。その指使いは酷くいやらしく、ねちっこかった。執拗な愛撫に、柔らかな乳肉がむにゅむにゅと撓まされる。

「告解しますよ聖女様、実は最初から狙っていました。いつもいつもこれ見よがしに揺すって……あなたこそ恥ずかしくないのですか？ こんな男好きのするデカパイ、とても聖職者の持ち物とは思えませんよ！」

「な、なんと破廉恥な！ そのような目で女性を見て、は、恥を知りなさ……ああっ！」  
卑屈な態度と打って変わり、責めに回った中年神父は大胆で容赦なかった。抵抗できないのをいい事に、今までの鬱憤を晴らすかのように激しく乳肉を虐めまくる。生意気な聖女が漏らす小気味いい悲鳴を楽しみながら、アベルはいやらしく耳元で囁いた。

「だからその言葉遣いは改めたほうが身のためですよ？ その枷には悪魔の呪印が仕込んであります。聖なる執行者様のお力でも、奇跡は起こせませんよ」

「あ、アベル神父！ あなたそこまで……うあっ!？」

グチュッ……ニチュ！ 新たな汚辱が下半身を襲った。右足に絡みついていた一本に続き、新たに伸びてきた目玉蟲が左足にも巻きついてきたのだ。さらに何本もの触手が続き、

両足を幾重にも淫縛される。

(くううっ。こ、これほど一斉に……汚らわしい！)

ヌルついた粘液をタイツに塗り込められ、薄生地越しにきつく媚肉を引き絞られる。一本だけでもおぞましかったというのに、何十という神経束に同時に集<sup>たが</sup>まれる汚辱感<sup>たが</sup>は凄まじかった。しかもそれぞれが激しく身をくねらせ、容赦ない愛撫に太ももを虐められる。

「さ、触るな！ やめなさい……せ、聖なる御名に置いて悪魔よ去れ……くううっ!？」

たまらない嫌悪に、咄嗟に抵抗する淫辱の聖女。だが裏切り者の言葉通り、神聖魔法はわずかにも効果を發揮してはくれなかった。静寂の夜道に、ただ哀れな悲鳴が響くだけだ。「だから言ったでしょう。悪い事はいけませんから素直になつたほうが楽ですよ。こんなエロい身体してんだ、禁欲的な生活で性欲持て余してんでしょうが！」

「な……そ、そんな！ この身は主に捧げたもの、そのような劣情など……んああっ！」  
聖職者の尊厳を辱める言葉責めに、咄嗟に反論する高潔のシスター。だが左右同時にむにゅつと乳房を揉みしだかれ、たまらず甘い声を搾り取られてしまう。

「そんな声で何言ってるんですか。聖職者が嘘はいけませんね。ほら、どうなんです！」

「か、神に誓って嘘など……くふう！ わたくし、持て余してなど……ふあ、ああっ！」

金髪を揺すり、卑しい言葉を否定する巨乳聖女。揉まれる乳房は熱を増し、密着した薄生地に汗を滲ませていた。触手にまみれたストッキングの内側は、噴出す汗でじっとり蒸れてしまっている。言葉とは裏腹、熱れきつた肉体は性の疼きを抑えきれないでいた。(つく。こ、この程度で疼いてしまうなんて……ああ、なんとあさましい身体なの……！)

清楚な美貌を紅潮させ、自らの反応に恥じ入る被辱の聖女。神父の言葉通りだった。敬虔なシスターは、当然厳しく自らを律している。だがいかに高潔な信仰心の持ち主とはいえ、やはりうら若き女。禁欲的な日々には、熟した肉体が不満を訴えないわけがないのだ。ねちっこい乳愛撫の快感は、押し隠していた情欲をざわめかせるのに十分すぎた。

「はあ、はあ、は……っん！ くふ……ん、ん！」

欲求不満な肉体を可愛がられ、あさましい肉欲がドロドロと沸き返る。罪と呼ぶにはあまりに快美な肉悦が、敬虔な聖女の心身を甘く甘く誘惑する。

「息が荒いですよ聖女様。どうやら、外見通り随分淫猥なおっぱいみたいですわね！」

「つく！ だ、黙りなさい……うあ、んうううっ！」

これまで情欲を否定し続けてきた聖乳を、欲望丸出しの指使いが無遠慮に蹂躪する。神父の技巧は、酷く手慣れたものだった。溢れんばかりの媚肉をわし掴みにされ、根元から搾るように揉み込まれる。かと思えば指を深くまで埋められ、爪を立てられ乳芯までを責められた。痛み混じりの乳悦に揺れる乳峰の先端を、親指の腹で意地悪く擦られる。

「くふうう……あ！ そ、そこは……あ、ああっ！」

わずかに浮き出している乳首の先端を、クリクリッと可愛がられた。冷たい夜風に晒されいいつも以上に敏感になつていた性感帯に、鋭い快感が駆け巡る。

「くふ……っん！ はっ……ん、ん——ッ！」

たまらず喘ぎそうになるも、エクレアはあさましい声を必死になつて抑え込んだ。後ろ手に拘束された指先を震わせ、ブーツのつま先を揺らしながらも、決して敗北を認めない。

「耐えますね。流石は名高きネーベルザルグの聖女様、この程度の責めには屈しませんか」  
「はあ、はあ……と、当然ですわ。い、いかなる時も主は見ておられます……んくっ。このような卑しい感情に、流されるわけにはいきませんわ……っ！」

潤みかけた瞳に、強靱な意志の輝きが煌めく。

墮落した神父とは格が違う。エクレアは真に気高き聖女なのだ。一途で頑なな信仰心の前には、この程度の誘惑などなんでもなかった。

「大した高潔さだな。その様子ならば間違いないが……そろそろ調べさせてもらうか」  
「ん、つく……あああっっ!？」

健気に耐え続けるシスターも、新たな淫激にたまらず細腰をくねらせた。ブーツを痙攣させながらも必死で踏ん張っていた両足を這い登り、何匹かの目玉蟲がスカートの内側にまで潜り込んできたのだ。

「お、おやめなさい！ そのようなところに……なんと不埒なッ……あ、っんううう！」

振り払いたくとも、神聖魔法は封じられている。せめてもの抵抗に内股気味に太ももを閉じるも、細い肉紐の進入を防ぐ事はできなかった。むしろ媚肉同士がムチムチと擦りあわされ、乱れたスリットから太ももを露出させて艶っぽさを強調してしまう。

(こ、こんな。ああ……このままでは……！)

太ももの肉感を十分に堪能した目玉触手が、足の付け根にまで這い進んできた。硬質な目玉が股間に押しつけられ、パンストに守られた恥部をグリグリと抉る。

「ふあっ、そ、そこ……んううっう！」

もつとも秘めやかな器官への接触到、たまらず喘ぎを漏らしてしまふ被辱のシスター。生地越しとはいえ鋭敏な急所を責められ、重く甘い刺激が駆け巡る。

「んっ、つく！ いけません……おやめなさい、そ、それ以上は許しませんわよ……っ！」  
声を震わせながらも、エクレアは気丈な態度を崩さない。だが言葉とは裏腹、熟れた肉体は恥辱と快感を抑えきれず、両足を切なげに震わせていた。

「クク、このザマで何をほざく。見えているぞ、お前の濡れようまでしつかりとな！」

「そ、そんな……嘘です！ こ、このような辱めで濡れるなど……んああ、ああっ！」

堅い眼球が腿肉を抉るように回転し、深く股間を弄られた。瞬間、クチュクチュと淫らな蜜音が耳を打つ。

（うう……こ、こんな。わたくし、こんなに……!?!）

濡れている——逃れようもない証拠を突きつけられ、羞恥と屈辱に頬が赤らむ。

今もねちっこく続けられる搾乳と触手責めの愉楽に屈し、聖女の股間は敗北の証をたつぷりと零してしまっていた。小刻みな馬車の振動に揺さぶられ、震える子宮から淫らな蜜液が零れ出す。欲求不満な肉体は一度濡れ始めれば過剰なまでの反応を示し、溢れた愛汁はシヨーツを染みてパンティストッキングにまで黒い染みを作っていた。ねっとり濡れそぼった薄生地には、陰唇の割れ目までが浮き出してしまっている。

「ククク、あさましいな。丸見えだぞシスター？ これほど淫らにシミを浮かせて……ふふ、貴様本当に処女か？ 物欲しげにヒクついているではないか」

「なっ……て、撤回なさい！ 神に捧げたこの身を、そのように淫猥な……あああっ！」



たまらない羞恥に美貌を紅潮させ、必死で拒絶する高潔の聖女。だが否定の言葉を言いきる前に、背後からきつく両胸を揉み潰された。

「く、ふうっ！　む、胸もっ……くうう、そ、そんなにきつくっ……あ、あはあああ！」  
「おやおや、悪魔に責められて濡らすなんて、罪深い身体してますねえエクレア様。いやらしすぎるおっぱい、わたしが神に代わって折檻してあげますよ！」

「なっ……ア、アベル！　神を騙るなどなんと畏れ多い……うあ、あはあああ！」

興奮した背教者は、さらに乳責めをきつくする。羞恥でいっそう熱を増した乳房が、上下左右に引つ張り回され捏ねまくられた。あさましくも勃起してしまっている充血乳首を、服の上から摘み込まれ潰される。

「う、つくう！　ち、乳首までッ……んああっ！」

コリコリッ、むにゅむにゅ！　感じやすい急所を執拗に責め抜かれながら、同時に乳房全体を可愛がられる。左右同時に叩き込まれる被虐の乳悦に、ブロンドを振り乱し悶絶する巨乳シスター。身悶えるたび椅子が揺れ、ブーツのつま先が切なげに跳ね上がる。

（い、いけませんわ。わたくしは神に身を捧げた身、このように淫らな感情に……！）  
敬虔な信仰心に縋り、エクレアは禁忌の感情を押し殺そうとした。だがそんな自罰的な思考が、抑えきれない悦びをいっそう加速させる。

「ふああ……ん、つくう！　はあ……あう……！」

堪えきれず漏れてしまう嬌声が、夜の野外に響き渡る。馬車の振動が椅子から股間に伝わり、子宮に伝わる衝撃がたまらなかつた。ガクガクと太ももが痙攣し、ストッキングガ

ら新たな愛液を染み出させてしまう。

「また漏れてきたぞ。随分敏感なようだな、肉唇も開きかけて、寂しさに泣いておるわ」

「そ、そんな……くうっ！ 嘘ですわっ、そのような劣情など……ふぁ、あひい!?」

開きかけた蜜穴に、眼球触手がゆつくりと先端を押し込み始めた。濡れたパンストを巻き込みながら、硬質な目玉がずぶずぶと聖女の内側に挿入されていく。

(な……いけません。これ以上は、ダメッ……!)

入ってくる——汚らわしい悪魔の触手が、聖なる秘窟に進入してくる。たまらない嫌悪感と辱悦に、聖女は喉を仰げ反らせ感じ入った。

「ダメです。ゆ、許しませんよ……これ以上はあつ、ぜ、絶対許さない……いつ!」

「安心しろ、処女は奪わん。だが確認のためには、もつと奥まで潜り込まねばなあ」

ズリュッ、グチュッ！ 淫らな蜜音を奏でながら、異形の触手が挿入される。硬質な球体に肉門が押し広げられ、ショーツごと粘膜穴に食い込まされていく。

「ふぁ……ダメ……いい、いけませんっ！ それ以上はあ……はぁ、ん！ し、主が見ておられるのです、主が、お許しになりませんわよ……おとおっ!」

頑なに閉ざしていた快樂の門をこじ開けられ、ゾクゾクと危険な期待感が駆け巡る。愛する神の名を口にすれば、背徳的な罪悪感が倒錯した愉悅を加速させた。

「そら、いくぞ……クク。これだけ濡れていれば丸見えだ、下着ごと挿入してやろう!」

「い、いやっ。そ、そんな罪深い……ああ——!」

メリッ。グチュ、グチュブウ！ 愛蜜をしぶかせながら、目玉触手がついに挿入された。

「うあ、は、入って……んんう、つくううう——！」

それは、神のため貞操を守り続けてきた修道女にとつて初めての快感だった。無理やりに股間を押し開かれ、おぞましい異物が身体の中に入り込んでくる。

(あ、あ……！ は、入っていますわ……汚らわしい悪魔が、わ、わたくしの中に……！)

男の味など知る由もない処女シスターだったが、肉目玉の堅さと太さは成熟した肉体を蕩かせるのに十分すぎた。濡れたショーツの裏生地に秘粘膜を擦られ、異形のボールに膣壁を抉られる——初めて味わう深い牝悦に、エクレアは細腰を震わせ感じ入った。

「うああ……あ、あ、あつ！ こ、こんな……あああつ！ し、主よお許しください……：御身に捧げた肉体を、こつ、このような……ふああ、あつああー！」

自罰的な思考が、被虐の悦びを掻き立てる。マゾヒスティックな恍惚が、高潔な信仰を蕩かせていく——。

「色は綺麗なサーモンピンクか、上玉だな。だが処女にしては随分淫乱だな。ククク、神の愛を唱えながら自慰行為にでも浸っていたか淫乱シスター？」

「こんなイヤらしい身体してるぐらいですからね……罪深いですね。神さまだつて呆れてしまいますよ！」

「く……い、いやですわ。こんなところで、そんな事言わないでください……いいっ！」

身悶える聖女に、下卑た哄笑を浴びせる悪逆の徒。辛らつな責め言葉が、信仰心を軋ませる。ゾクゾクする背徳感に、エクレアはケープを震わせ身悶えた。誰も見ていないとはいえ、野外で晒し者になっているという屈辱が被虐の快感をいつそう倒錯させる。

「どれ、もう少し奥まで見させてもらおうか……」

「ああ……ダ、ダメですっ！ も、もうっ。これ以上は……いけませんわあ……あっ！」  
濡れたストッキングを限界まで引き伸ばし、淫虐の挿入が進められる。さらに深さを増した肉悦に、たまらず金髪を振り乱す巨乳シスター。ビクッと背中が仰け反らされ、淫らに腰が突き出された。

「何がダメなのですか……へへ！ まさか悪魔に嬲られてイクんですか、罪深い女め！」  
「聖女エクレア。貴様の信仰が敗れる瞬間……たつぷりとこの目に収めてやるぞ！」

生意気な聖女を籠絡寸前まで追い詰め、勝ち誇る陵辱者たち。  
だが、彼らは気づいていなかった。

「ダ、ダメ……ダメですう！ そ、それ以上は主がお許しになりませんから……ねエ！」  
聖女は、これから為す行為への、危険な期待感で震えているという事を。

「アハハッ……そ、そうですわ。罪には罰を、悪には裁きを……あなたたちには、聖裁が下りますわア……」

快楽に潤んでいた瞳に、異様な輝きが宿る。桜色の唇に、嗜虐的な笑みが浮かんでいた。  
「はあ？ あんた、今さら何を……気でもおかしく」

突如態度を豹変させたシスターに、訝しげな表情を浮かべるアベル神父。直後——。  
「グアアア……目がッ、俺の目がア——ッ!？」

響き渡る、悪魔の悲鳴。

「なっ!? バ、バレギロ様……っひいいい!？」

「ぐああ、ふ、深つ……ひぎいつ！ あぐう、む、胸がちぎれ……ひ、ぎいい——ッ！」  
これ以上の落下を防ぐべく、エクレアは必死に胸責め触手を掴んだ。だが粘濁まみれの  
手袋はヌルヌルと滑るだけで、縋りつく事さえできない。  
重力に従い身体が下がり、串刺しは進むばかりだ。

「ひあ、あぐううつ！ ふ、深い……あぐうつ、お、おなかあ……あがぁ、んぎいい！」

肛門が裂け内臓が抉られ、乳房が引つ張られ官能を焼き尽くされる。体内にまで吐き出  
された媚毒のせいで、それらの苦痛はそのまま蕩けそうな快楽へと倒錯してしまっていた。

「ひああ、あ、あ!? あ、熱い……。胸も、おしりもお……す、すご……ひいい！」

破滅的な苦虐に焼かれ、いやいやと首を振って身悶える宙吊りシスター。全身から力が  
抜け、支えを失った両足がだらしなく開かれていく。タイツに包まれた美脚は左右に開か  
れ、スカートのスリットからはしたなく太ももを曝け出していた。左右にくつろげられた  
秘唇から、粘っこい愛液がだらあつと零れだす。

「串刺しにされて大股開きか、無様で罪深い姿だな。こいつらも罰したがっているぞ」

「ひあ、らめ……も、もう動かないれ……えっ！」

空中に吊り上げられ、もはや逃れることもできない。血色のアメーバたちは愛液を啜り  
ながら増殖し、両足どころかヒップにまで魔手を伸ばしていた。豊満尻果に粘りつき熟れ  
た肉感を確かめるように揉み潰す。

「ふああ、あん！ お、お尻……んひいいいつ！」

タイツを染みてきた粘塊に直接尻肌を舐め上げられ、容赦なく揉み潰される。快楽の炎

に炙られた媚肉を責め立てられ、甘い快感が駆け抜けた。さらにはグイグイと尻たぶを左右にこじ開けられ、串刺し槍をいっそう深くまで啜え込まされる。

「ひっ、やあ……つぎっ！ ま、また深くう……んあぁ、お、お尻……ひぐあぁあぁ！」

より深度を増した肛虐に、エクレアは金髪を振り乱し悶絶した。腸管どころか腹腔までをぐちゃぐちゃに掻き混ぜられ、お腹がボコボコと痙攣する。

（くう……だ、だめっ！ こ、これ以上は……！）

これ以上の淫虐を防ぎたくても、宙吊りにされた状態ではどうしようもなかった。きゅつと肛門を引き締めてもアメーバたちに尻を可愛がられ、快感で抵抗を殺される。乳首を貫く肉槍を掴んで締めつくも、粘濁まみれの手袋はヌルヌルと滑ってしまっただけだ。

むしろそんな摩擦に悦び、肉触手はいっそうの勢いで蠢いて豊満乳房を責め立ててきた。鋭い毒針が乳管を穿り返し、肉蟲どもが鋭敏な乳房を搾りまくる。

「ふぁ、ふぁぁ！ ま、またおっぱい……か、感じやすいところばかり……んひいひい！」

激しい乳虐に、持て余していた媚肉をこれでもかと可愛がられる。串刺しの虐痛とは一転、あまりにも甘美すぎる乳悦に、涙を流しよがり乱れる淫乱聖女。責めを止めるためか、それともいっそうの乳悦をねだってか、血まみれの細指は無意識のうちに肉管をシゴいてしまっている。そんな破廉恥な愛撫に応じ、触手たちが再び精液を乳管にブチまけた。

「ひっ、ひ、ひいひい！ そんなぁ、ま、またちくびに……んっひいひいひい！」

ドブ、ドブドブドブ！ 両の乳首に再び催淫液を注入され、さらなる快楽の炎に炙られる。さらにはアナルの締めつけに悦んだ串刺し槍も欲望を解き放ち、尻穴どころか内臓に

まで悪魔の精液を注ぎ込んできた。

「あ、あああつ！ お、お尻も出され……んひい熱ひい、あちゆ、あちゆひのおお〜！」  
甘い炎に身体の中から焼き尽くされ、再び意識が沸騰する。宙吊り状態でだらんと広げられた両足が痙攣し、股間からまたしても絶頂の証が噴出した。

「ひ、イ、イッ!! いやあ、ま、また気持ちよくなつて……ああああ！ イっちゃう……  
わたくし、ま、また罪を重ねてイッちゃふううう〜!!」

ぶしゃ、ぶっしゃあああ！ 股間からは愛蜜を、乳房と尻穴からは白濁を吹き零し、全身を血のようなスライムにまみれさせ、串刺しにされたままイキ狂う淫乱シスター。涎と涙にまみれたアへ顔は、もはや正気さえ消えかけている。

「そうだ。罪にまみれ墮落せよ。今宵、貴様は神の手を離れ我ら悪魔のものとなる」  
墮ちゆく聖女に、魔伯爵はゆっくりと近づいていく。その股間では、黒々とした肉棒が勃起していた。

「我の手で貴様の純潔を奪つてやる。さあ、悪魔の花嫁に成り下がるのだエクレアよ！」  
「ひ……や……や……そ、そんふあ……あああつ！」

アクメの余韻に腰を揺すり悶えながら、怯えた声をあげる被虐の生け贄。未だに絶頂蜜を零し続けている秘裂めがけ、悪魔の男根が迫っていく。

人間的な外見と違い、ベリルオーズのペニスはまさしく悪魔的だった。太さも長さも女性性の腕ほどもあり、野太い血管が無数に浮き出している。雁首は凶悪に広がり、毒蛇じみた龟头からはだらだらと濃厚な白濁が吹き零れている。天に向け聳え立つ悪魔の性器は、

それ自体が殺戮のための処刑具を思わせた。

(うあ……ふ、太い。お、大きすぎますわあ……!)

いかなる処刑具よりも残酷な女殺しの凶器を前に、きゆうんつと子宮が竦みあがる。思わず震えてしまった細腰を、悪魔の両手が優雅に抱擁した。勃起しきった肉凶器が、ぐつと股間に押し当てられていく――。

「うあ……い、いやれふう！ やめ、やめてくださひ、そんなのらめえ、らめなのお!!」

ぐつ、と腰を突き出された瞬間、エクレアは声を張り上げ絶叫した。これまでの毅然たる態度をかなぐり捨て、呂律も回らないまま必死になつて哀願する。

「いや、いや、いやああ！ いやなんれふう、そ、それだけはらめなんれふう！ 純潔を失うのは……そ、それだへは……それだへは許してくらはひい！」

敬虔なシスターにとつて、処女は特別な意味を持つ。

神に捧げるべき純潔を――信仰の証そのものを汚される。それは神にすべてを捧げた聖女にとつて、己のすべてを奪われることに等しかった。

(い、いや……いやですわ。し、主よお救いください。わたくし、わ、わたくし……!)

死など怖くはない。だが神に見捨てられるのは、死よりも恐ろしいことだった。

「い、いや……許してください！ お、願ひしまふからあ……あ！ あっあア――!」  
メリッ……ズブズブズブッ！ 惨めな哀願などまるで無視し、悪魔の肉棒が突き刺され

た。凶悪な肉槍はタイツとショーツを引き裂き、一気に最奥まで侵入しようとする。

「ふむ、流石は神の花嫁……素晴らしい味わいだぞ」

「は、入って……いやあ！ あ、悪魔のモノなどに……あああ、け、汚されちゃうー！」  
初めて異物を挿入される苦痛に、エクレアは喉を仰け反らせ悶絶した。だが聖女が感じているのは、肉門をこじ開けられる苦痛でも、お腹を満たされていく圧迫感でも、鋭敏な粘膜を擦られる快感でもない。

（ああ、主よお許しください。わたくしは……！）

ただあるのは——すべてを失う絶望と恐怖だけ。

「や、やめへえ。神の花嫁の純潔を汚すなんへ許されません、れ、れふから……あつ！」  
ぼろぼろと涙を流しながら、エクレアはヴェールを揺すって悪魔に懇願した。涙にまみれた表情は、強気な殺戮者とは思えないほど惨めで弱々しい。

「お、お願いしまふっ……も、もう汚さないで。こ、これ以上は……お、おねがいれふから許ひへ……な、何でもしまふからもう許してくらはひ……許して……ええ！」

当然、そんな哀願など聞き遂げられるはずもない。

「クク、何を今さら。貴様はすでに穢れきっているではないか……さあ、受け入れろ！」

「や、い、いや……あつああああ——！」

暴れる腰を抱き抱えられ、力任せに抽送された。粘膜を抉り返しながら猛進する極太亀頭が、神聖なる未踏の場所を蹂躪する。何かが抉られ、ビリッ、と鋭い痛みが駆け抜けた。

「ひ、そ、そこ……痛ああああ！」

薄膜を破られる痛みが、ピリピリと広がる。これまでの拷問じみた責めにくらべれば何でもないはずなのに、その痛みは魂がはずたはずたに引き裂かれてしまいそうなほど辛かった。

(だ、墮落してしまう……処女まで失ったら、完全に主に見捨てられてしまいます!)  
当然だ。神にすべてを捧げてきた聖女にとって、処女喪失はすべてを失うことを意味しているのだから。

「い、いや……いやああ! み、見捨てられたくないんです、わたくし、処女じゃなくなつたらだめなんです! で、ですからそこだけは許してください、お願い、そ、それ破らないで……処女だけは許してえ、処女は、う、奪わないでください……いい!」

もう、恥も外聞もなかった。赤い瞳からポロポロと涙が溢れ出す。己の存在をかけ、高气きシスターは無様にも魔物に許しを乞うた。

「お願い、おねがいですう! なんでもしますからあ……ああ、そ、それだけは許して。処女だけは奪わないでください、み、見捨てないでください……!」

あまりに悲痛な、幼子のような哀願。だが、願いを聞き遂げる神はここにはいない。

「いや許さぬ。ククク……刑罰、執行!」

「い、いやああ……いや、あつああああ……!」

ブツッ! 小さい、だが鋭い痛みが膺に走り——肉穴から、タラリと赤い筋が零れた。

「あ……あ……あ、ああつ!」

処女を奪われた——決定的に汚された。たまらない虚無感が、聖女の心を塗りつぶす。

「ハハハ! 処女は貰ったぞ! これで貴様は罪人だ、もはや神の花嫁などではないぞ!」

「ひ……や、いや……いやああああ……!」

穢された。神に見捨てられた——すべてを否定され、心を空虚が満たしていく。金髪を

振り乱し泣き叫ぶ聖母の涙顔は、痛ましいまでに惨めだった。

「いやあ……いや、いやあ！ し、主よ……わ、わたくはあ……ああ、あはあ……！」

串刺された股間からは破瓜の証を、潤んだ瞳からは絶望の涙を流し、絶望に悶える被虐の聖女。すべてを失ったショックに、赤い瞳は焦点を失いかけていた。

だが、悪魔の肉刑はこの程度では終わらない。

「ククククク、純潔を失った貴様に、もはや神の花嫁の資格はない。もはや神は貴様を救つてはくれんぞ。さあ宴だ悪魔の花嫁よ……地獄の快樂で墮落させてやる！」

「うあああ、そ、そんな……あつはあああ——！」

メリッ、ズブズブズブ！ 処女膜を失った腔奥にまで、極太巨根が一気に突き込まれる。空虚な腔内に響き渡る重撃に、エクレアは喉を仰げ反らせ絶叫した。

「ひ、ぎ！ ふ、深ひ……ひ、んひいいい……！」

処女を失ったばかりの肉穴を、容赦なく際奥まで犯される。いつもは意識することさえなかった奥の奥、神秘なる肉園をぐつと押し開かれ蹂躪される。

「はああ……んあ、あふあああああ！ こ、こんな……は、激し……いっひひいいい！」

初めて味わう、奥の奥まで犯される被辱感。もはやすべてを失い、絶るものもなく、ただただ成す術なく蹂躪されるのみ。その悦びたるや——。

「す、すご……いいっ！ あ、悪魔に犯されへるのに……罪深すぎるのに……いいいっ！」

「さあどうだ？ 気持ちいいか……言ってみろ！」

「は、はひ……いい、いい……ですうう、これえ、す、すご……すごい……ひいいいっ！」

心の空虚を満たすのに、あまりに十分すぎた。

「き、気持ちいい……んあぁっ！ お、奥まで入って……太くて、お、おっきい……いい！ 失った純潔の代わりに詰め込まれた快楽に、もはやエクレアは逆らうことができなかった。自らガクガクと腰を振り、涎を吹き零し媚びまくる。蕩けきったアへ顔からは、もはや正気さえ消えかけていた。

「ハハハハ、墮ちたかエクレア！ 悪魔の快楽の素晴らしさ、たっぷり教え込んでやるぞ……ククク、我の手で神の事など忘れさせてやろう！」

聖女からただの雌にまで墮ちた肉贄を、魔貴族は容赦ないストロークで責め立てた。奥の奥まで届く激しいピストンで、子宮口までを貫き犯し抜く。

「はい、はひ、はひいつ！ ひああ、そ、そんなトコまれ……ふ、深ひ……いいー！」

膣奥までを犯される激感に、悪魔の花嫁は金髪を振り乱して悶絶した。抜き差しのたび硬い瘤に粘膜を抉られ、狂いそうな快感が駆け巡る。一突きごとに宙吊りの身体が浮き上がり、串刺されたままの乳房がぶるんぶるんと揺れまくった。串刺し槍や搾乳蟲も蠕動を早め、墮落した肉体を容赦なく廻りまくられる。

「ひああぁ……あひ、んひ、んっひいいいいい！ す、すごお……ああ！ おひりも、お、おっぱひも……ひああ、お、犯され……あひ、あっひいいいー！」

肛門から胃袋までを貫かれ、敏感すぎる乳房を搾られながら乳首を犯され、忌むべき悪魔に処女まで奪われ——その苦痛のすべてが、破滅的な快感へと傾倒していく。

(ああ……わたくし、こ、このままでは……もう！)

墮ちる——墮ちてしまう。そして、もう誰も救ってくれはしない。快感と虚無感に意識が消えるその刹那——穴を犯す肉蟲たちが、ドク、ドクと脈を打った。

「はあ、はあはあ……ひい!? そんな……こ、これ。ひあ……ま、また……あつああ!?」

射精される——尻の中にも、乳首にも、そして今度は膣穴にまで悪魔の精液を注がれる。絶望感とともに、破滅的な期待感が虚ろな心を蕩かせた。無意識のうちにカクカクと腰が躍り、震える両手は射精を急かすように肉根をシゴいてしまう。あさましい愛撫に応じ、まずは乳房を貫いている毒針が欲情を解き放った。

「ひっ、ち、乳首……あつはあああああゝ!」

ドブッ、ドブ、ドブドブドブドブドブ! 四度目となる、淫乱乳への中出し刑。すでにクセになってしまっている罪の味に、聖女の意識は掻き消えた。

「イ、イクッ……ひひゃあああ、あつひ、あつひいいいいい! あはあああまたイカされてるう、お、おっぱい熱くて……いつきひいいいいい!!」

たわわな巨乳をぶるんぶるんと揺すりまくり、声の限りにイキまくる淫乱聖母。乳房での絶頂から休む間も与えず、腸内の肉槍も怒涛の精液をブチまけた。

「ひいい……イひ、イひいいいいいンッ! お、お尻いい……ひあああらめえ、お尻も出されてる、んああお尻あつひのお、お、お尻もイクうう!!」

腸管どころか胃袋にまで媚薬を放たれ、身体の内側から汚される。持ち上げられた臀部から腸液を噴出し、口からは吐瀉物混じりの精液を吐き出しながら、シスターはまたしても昇天を極めさせられていた。

「ククク、仕上げだ……己の犯した罪の重さ、その身で受け止めるがいい」

「あ……あ、あひ。ひああ、ま、まだ……あ……!!」

悪魔の肉刑は、まだ残っている。さらなる媚薬を注がれた上、イキつばなしで怖いぐらゐに感度を増している女体へ、最後の罰が下されるのだ。膣奥にまで突き刺された極太巨根が、ビクビクと脈を打ち――。

「出すぞ……膣奥にたつぷりと射精してやる。聖女エクレアよ、我が精を受け悪魔の仔を孕むがいい!」

「ひ、ああ……い、いやああ! そんな、そんなの罪深すぎ……いつひいいい……!!」

プシャッ! ドバ、ドッバアア! 忌むべき子種が、破瓜直後の膣奥に注ぎ込まれる。  
(ひあああ、ダ、ダメ……こんな、こんな……!!)

処女を奪われただけでなく、女として決定的に支配される。破滅的な被虐感に、マゾヒスティックな絶頂感が止まらない――!

「イ、イク……ひああ許されません、許されまへんはあ……ま、またイクなんへ! あ、悪魔に中出しされへえ、またイつてしまうなんてえええ!!」

ぶしゃぶしゃぶしゃああ! 引き裂かれた肉穴から、大量の愛液が潮を吹く。乳首でも、排泄器官でも、そして処女を失ったばかりの性器でも――穴という穴で姦淫の罪を犯し、聖女はイつてイつてイキまくった。

「ハハハハハ! これで貴様は悪魔の奴隷だ。墮落せよ神の犬よ……ハハ、ハハハハハハ!」

「ひあああ……い、いやあああ。こんなあ……主よ、主よ……あ、あひいいいイッ!」

あまりの快感に、グツタリと身体から力が抜ける。重力に従い、緩んだ肛門にズブズブと肉槍がめり込んだ。胃袋の中にまで達していた触手がさらに真上へと突きあがり、真下から咽喉までもを貫かれた。同時、再び大量の精液を内臓の中にプチまけられる。

「んひああああ……ひい、ひいいつ！ ま、また出……ひ、イ、イッ！ ひあああ、な、中に出されてえ……ひああ、ま、またイ……イッ……！」

またしても湧き上がる絶頂感。同時に、絶望的な質量が口腔にまで突きあがり――。

「終幕だ。究極の快楽をくれてやる……貴様の望み通り、快楽の中で処刑してやろう！」

「ひああ……イ、イッ、ふああ何か来るう……くひいイイク、イクイクイッひい〜!!」

ずぶつ……どぶつ、ぶつしやあああああ!

絶叫じみたイキ声と同時に、限界まで開けられた口腔から、野太い肉槍が突き出した。

(な……こ、こんな!? わ、わたくし……い!)

信じられない光景に、聖女は赤い目を見開いた。尻穴から突き刺された肉棒が、口腔を貫通して突出している。敗北の断罪者は、文字通り串刺し刑にされてしまったのだ。

「ハハハ、断罪完了だ！ 望み通りの串刺しの姿で、快楽の炎で焼き尽くされるがいい！」

「ひぎ……や……やあ。そんなあ……し、死ぬ……わたくひ、も、もう死……イひい！」

ドブ、ドブドブ！ プッシュアア！ 串刺された聖女に、触手たちが大量の精液を注ぎ

込む。乳首に、尻に、内臓に――そして再び膣奥に、止めの中出しがプチまけられる。

「ひああああ……イ、イ……イきひいひい！ し、死ぬううう……んおおおもう死ぬつ、イ、イキすぎて死んじやうううう〜！」





(あ、熱い。どんどん大きくなって……。まるで、掌の中で悦んでいるみたいですね……。) 視覚を封じられた分触覚は鋭敏になり、不気味な脈動に酷く不安を掻き立てられる。だが聖母は嫌がる素振りなど少しも見せず、献身的に奉仕に努めた。

(メアリ……。これがわたくしの選んだ道です。人は、誰かを救えるのです！)

人々を救うため、そして闇に堕ちた友を救うため。懸命に介抱を続ける純真聖女。だがそんな健全な姿に対し、浴びせられる言葉は酷く悪意に満ちていた。

「へ、見ろよ。あんなに一心不乱にシゴいてやがる」

蔑むような言葉が、周囲で沸き立つ。同時に、下卑た後期の視線が注がれるのを感じた。

「ああ、やっぱ魔女だな。好きなんだろうな……。見ろよ、あの嬉しそうな表情」

「ああ。興奮して乳首もピンピンになってるぜ」

「……！」

その言葉に、自分の破廉恥な姿を再認識させられる。たまらず、かあつと顔が火照った。

「な、何を言うのですか。わたくしは彼らのために施しているだけです、そのような……。」

「シスター、そりゃないぜ。俺たちの触りだしてから、あんたも随分ノリ気じゃないか」

咄嗟に否定する聖女だったが、施しを受けている病人たち自身がその言葉を遮った。

「アンタも楽しんでるんだろ？ 指使いも随分大胆になって……。へへ、好きなんだろう」

「そ、そんな。酷いですわ、わたくしはあなた方の望む通りに……。うあ、ん、んっ！」

弁解しながらも、細指はせわしく動き続ける。ヌルついた粘液にまみれた手袋越しに感じる脈動から、いつの間にか指が離せなくなってしまうているのだ。

(やっ……ま、また大きくなっていますわ。それに、このヌルヌル……や、やはり……)  
両手に握られた、硬く熱く脈打つ肉塊。魔城での辱めが想起され、秘めたる被虐癖が疼いてしまう。恥辱に頬が熱くなり、はあ、と熱い息が漏れた。

「へへへ、今さらカマトトぶりやがって。わかかってやってるくせによ。自分が何シゴいてんのか、まさか気づいてないわけじゃないよなあ？」

「な、何って……やあ!? そ、そんなに擦りつけないで……激しくしないでください！」  
突如、男たちが自ら動き、『患部』を掌に押しつけてきた。溢れる粘濁をグラブに塗りつけながら、しなやかな指の感触を貪るように肉塊を押しつけてくる。

「いいぜ。この手袋のスベスベも、繊細な指も……流石魔女だな、搾られそうだし！」

「そ、そんな……何を仰っているのですか。わたくしはあなたの病を……ああっ!？」

ビク、ビクビクビク！ 両掌で、二本の肉塊が同時に激しく脈を打った。同時に大量の粘液がだらあつと吹き零れ、そのトロみと熱さに両手が戦慄く。

(こ、このいやらしい感触……や、やはり……!)

硬さに熱さ、たくましい脈動。そして、むわつと香る淫靡な性匂。実際、想像はついていた。推測を確信に変えたのは、無邪気な少年の野次だ。

「ママ、おちんちん握って興奮してる。みんなの言う通り、やっぱり変態魔女なんだね！」

「——!」

自分を母と慕う孤児に罵倒され、たまらない羞恥心が駆け巡る。同時に、周囲でどっと嘲笑が巻き起こった。目隠しされたままの美貌が、羞恥に赤らむ。

「な……そんな！ 違いますわ、わ、わたくしは」

「わかってますよ、病を癒やすためでしょ。ほら、だったら証明してくださいよ」

思わず指の動きを止めてしまったシスターに、新たな『患者』が迫った。熱く滾る『患者部』が、今度は剥き出しの胸乳に押し当てられる。

「間近で見るとすごい迫力っすね。胸、借りますよ」

「ああ……そ、そんな。お、おっぱいなんかで何をするのですか……んふううっ！」

ずちゅ、にちゅっ。先走りを擦りつけられると同時に、勃起肉根が胸の谷間に滑り込まされた。剥き出しの乳肌を直接責められ、聖母は甘い息を吐き身悶える。

「このデカパイ、ご利益ありそうだア。俺の病氣、コイツで挟んで癒やしてくださいよ」

「な!? こ、断ります、そんな汚らわしい真似！」

目では確認できないが、伝わる感触と臭気から男性器である事は間違いない。剥き出しの乳房にそんな汚物を擦りつけられ、その上変態的な胸奉仕まで要求されて、敬虔なシスターは咄嗟に拒絶の言葉を吐いていた。

（そんな……む、胸で男の方の相手をするなんて。そんなの、罪深すぎますわ……!）

性器同士の交合でさええない。愉楽を求めるだけの肉体遊戯など、考えるだけで忌まわしい。人々を救うためとはいえ、聖職者に許される行為ではなかった。だが異端審問の法廷で、被告に反抗は許されない。

「おいおい聞いたかよ、病人相手に酷い言い草だ」

「自分からするって言い出したのにな。所詮魔女か」

間髪いれず糾弾が飛ぶ。言い繕う前に、メアリの言葉が追い討ちをかけた。

「いいのよ、イヤならしなくても。結局、あなたも自分が一番可愛いんでしょ？」

「つくうう！　ち、違う……わたくしは、もう誰も見捨てたりなど……きやううっ!？」

懊悩する聖女を急かし、男が腰を擦りつける。硬い肉棒を挿り込まれ、柔らかな巨乳がぶるんと揺れた。

「だったら早くしてくださいよ。そのデカパイで男を満足させる救済のやり方も、当然神様に教わってんでしょ？」

「な……あなた、何という恐れ多い事を！」

自分の肉体だけでなく信じる神まで蔑まれ、さしもの慈母も激昂した。だがそんな高潔な訴えも、魔女狩りの狂った空気に空しく吞まれていく。

「教えてあげればいいじゃないですかネーベルザルグの聖女様。迷える子羊に神の真理を説くのも聖職者の務めですよ。くく、何なら手伝ってあげましょうか」

いやらしく呟くのは、背徳の神父アベルだった。跪いた聖職者の背後に陣取り、真後ろから手を伸ばして剥き出しの両胸をわし掴みにする。

「ア、アベル！　あなたは何という事を……」

身をもつて神の愛を教えてやったのに、何も反省していない。救いようのない外道に憤りの声をあげるエクレアだったが、背信者はまるで意に介さない。

零れそうほどの豊乳を背後から掴むと、アベルは根元から搾り上げるように愛撫し始めた。背後からむにゅむにゅと揉み潰され、両巨乳が柔媚に撓む。

「おお、やはり素晴らしい感触ですぬ聖女様。あの時は残念な結果に終わりましたが今日は違いますよ……へへ、たっぷり楽しませてもらいますからね」

「あ、あなたという人は……ふうん、あああつ！」

にゅ、むにゅ、むにゅ！ 左右五本ずつの指が遠慮なく動き、柔らかな乳房を容赦なく揉み潰される。鋭敏な弱点を力強く愛撫され、甘い乳悦が駆け巡った。

（く、くう！ この男……ああ。あの時と同じ……なんていやらしい指使いなの……！）

視覚情報でなく、身体で実際に感じてしまう。これまで背徳の限りを尽くしてきた下衆の指使いは、やはり卓越したものだ。感度抜群の急所を馬車での淫辱以上にねちっこく可愛がられ、嫌悪以上に女としての悦びが止められない。ゾクゾクと駆け巡る乳悦に、エクレアは祈りの姿勢のまま感じ入った。

「お、おやめなさい。神父……こ、このような罪深い事、神はお許しに……あふあああつ！」

「相変わらず感じやすい乳房だ。それじゃいきますよ、パイズリは、こうしてやるんです」

下卑た笑みを浮かべると、アベルは左右の巨乳をきつく摘んで自分勝手に動かし始めた。左右から中央に寄せるように乳峰を搾り込み、柔らかな谷間でペニスを挟み込ませる。

「あ、あああつ！ や、やめなさい、こんな淫猥な真似……んくうううっ！」

乳谷深くで無理やりに肉棒を咥え込まされ、羞恥と屈辱に打ち震える乳房のシスター。だが嫌悪の声とは裏腹、熟れきった巨乳は溢れんばかりの包容力を発揮し、男のものを従順に受け入れていた。白い肉肌は蕩けんばかりに柔らかく撓み、硬い肉棒を包み込む。

「お、うおお！ 柔らかく吸いついて……くうう。な、なんていやらしいチチなんだ」

母性たっぷり肉の乳房にサンドイッチされ、男は感極まった声をあげ身悶えた。吸いつくような柔乳をさらに味わおうと、自ら腰を振ってこすりつける。

「あ、あつ、あつ！ いや……やめてください。む、胸でなんて罪深い……んああう！」  
剥き出しの乳房に伝わる、おぞましいまでの雄の存在。視覚を封じられたせいで感覚はいつそう研ぎ澄まされ、実際以上に嫌悪感を煽られる。さらには神父の手によつてむにゅむにゅと乳房を動かされ、自分の意思と関係なくパイズリ奉仕を強要された。熟れきった乳肉が迫力満点に揺れ躍り、男のモノを愛撫する。

「へへ、見ろよ。今までも散々やりなれてるだろうな、パイズリ似合いすぎだぜ」

「そ、そんな。していませんわ、わたくし、おっぱいでなんて……ふああ、くふうん！」  
聴衆からの野次に、自らの晒している罪深い姿を知らしめられる。生真面目なシスターは、自らの痴態を現実以上に強調した形でイメージしてしまっていた。

（わたくし、胸で奉仕しているのですわ。こ、こんなに大きなモノを、おっぱいで……！）  
柔らかく弾む胸、いやらしく撓む媚肉。もとより持て余していた媚乳は、今やその奔放な本性を露にし、男のものを挟み込んで悦んでいる——そんな自分の痴態を想像し、エクレアは自罰の念に懊悩する。だが清楚な心とは裏腹、肉体の反応は違っていた。

「はあ、はあ……つく、ふっ！ うあ、む、胸……そ、そんなに激しく……んふうっ！」  
背後から巨乳を掴まれ、激しく揉み込まれる。そのたび駆け抜ける、嫌悪以上に甘い喜び。ドク、ドクと脈打つたくましい鼓動に、胸のときめきが止まらない——。

（な、何ですか……これ？ 胸が疼いて……あ、熱い。こんな……ど、どうして？）

熟れた両巨乳は、その中に御しがたいほどの肉欲を秘めている。それは、魔城での陵辱で思い知らされていた。だが、それでもこの感覚は異常だった。左右の乳房にそれぞれ五本ずつの指を埋められ、思いっきり外側に開かれてから中央にぎゅっと寄せられ、柔らかな乳房の内側に勃起ペニスを挟み込まされれば――。

「あ、ああっ！ あ、熱……ふああ！ ダメ、おっぱいそんなにしたら……あふあ〜！」  
耐えがたい乳悦に、エクレアはぶるんぶるんと巨乳を揺らし身悶えた。民衆の前だというのに声を抑えきれず、聖職者にあるまじき嬌声を漏らしてしまう。

「相変わらず敏感ですねえエクレア様。少し揉んでやった程度で可愛い声で泣いて、前よりもっといやらしくなってるんじゃないですか？」

「ア、アベルう……っうあ!? だ、だめ……くう！」

いやらしく耳元で囁きながら、悪徳の神父はいっそう大胆に指を蠢かしてきた。開いては寄せての男根奉仕を強制させながら、人差し指が乳肌を滑って移動していく。

（ああ……う、動きが変わった？ 何を……っ、次は何をする気なのですか……？）

目視できないせいで、次の責めを予測できない。変幻自在の指使いに、不安と同時に、ゾクゾクとマゾヒスティックな期待感を募らされる。と、突然――。

「はあ、はあ、はああ……っひいイ！」

コリ、コリッ！ 意識していなかった、しかしその実期待していた場所を抓られた。

「は、ひイッ！ そこは……あ、はあああん！」

乳房の先っちょから迸る、稲妻のような快楽。

「ああ、そこだめ！　ち、乳首はだめです……う！」

どんな責めを受けているのかは、敏感な身体が如実に答えてくれていた。敏感すぎる箇所をクリクリと可愛がられ、エクレアは喉を仰げ反らせ悶絶する。

「相変わらずこれに弱いようですね、まったく可愛いお人だ。ほら、これならどうです？」

「や、やめ……ああっそんなに揉まないで……お、おっぱいばかり……卑怯ですうう！」

もにゅもにゅ、クリクリ。力強く搾乳されたかと思えば、今度は乳豆を抓られる。予想不可能な変幻自在の指技に、聖母は成す術なく翻弄されていた。

（ああ、また揉まれて……くううっ乳首もだめ……ああ、こ、こんなにされたら……！）

好色な指技に屈し、むしろ嬉しそうに変形を繰り返す淫乱巨乳。両の肉豆はピンピンに尖りきり、スーツからずれて破廉恥極まる勃起姿を見せつけている――。

（ど、どうして。わたくしの身体……お、おっぱい。どうして、こんなに罪深い……っ！）

そんな恥知らずな嬌態が、指摘されるまでもなくまざまざとイメージされてしまう。高潔ゆえの自罰的な思考に、マゾの官能がいつそう高ぶりを増した。無意識のうちに、肉棒と触れている両手が戦慄く。たくましい雄の存在感に醜酔し、聖女の細指は自ら貪るようにペニスにシゴいてしまっていた。

「パイズリしながら必死になって手コキして。淫乱魔女め、そんなにチンコが好きか！」

「ち、違います！　わたくしはこんな汚れたモノ……いや、いやですのに……い！」

しゅしゅ、シコシコ。弁解も空しく、疼く両手は男根への奉仕を続けてしまう。たくましく脈打つ肉棒が汚らわしいのに愛しくて、なぜだか指が離せない。



この続きは製品版をご購入の上、  
お楽しみください。

編集・発行

**株式会社キルタイムコミュニケーション**

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

**<http://ktcom.jp/>**